暮らしを支えるみなとの情報誌

Vol.98 August 2021

港湾

8 月号

特集 Cyber Port と CONPAS

特別寄稿

デジタル庁設立に向けて

慶應義塾大学環境情報学部教授
内閣官房情報通信技術（IT）総合戦略室室長代理
神成淳司

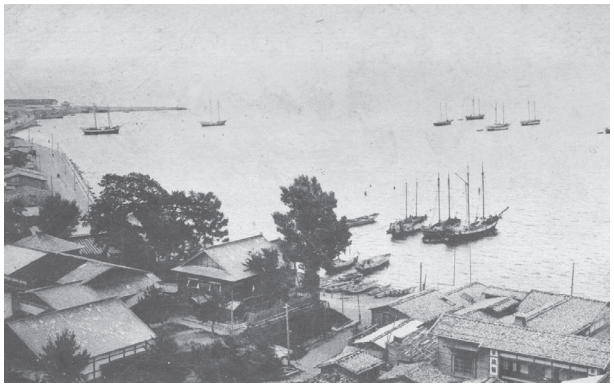
公益社団法人日本港湾協会
The Ports and Harbours Association of Japan

鰺ヶ沢町教育委員会総括学芸員　中田書矢

津軽の京祭り・白八幡宮大祭

北前船と青森県の港

三方を海に囲まれた本州北端の地、青森県は、日本海海運と太平洋海運、津軽海峡をはさんで北海道とも結ばれていた海の交差点でした。県内の北前船寄港地は数多く、津軽地方の「四浦」、下北半島の「田名部七ヵ湊」のほか、南部地方の野辺地・八戸が有力な港として挙げられます。なかでも津軽西海岸の港は、各地の産物を満載して北上してきた北前船が、津軽海峡を一気に乗り切るための風を待つ「風待ち港」としてにぎわいました。


明治時代の鰺ヶ沢港と北前船

全国各地の北前船が立ち寄り、風待ちによる停泊日数も多かったこの地域では、独特の文化圏が形成されました。中世以来の風待ち港とされる深浦の円覚寺は、北前船の祈願寺として、全国に例を見ない髷額（まげがく）や船絵馬などの信仰資料が数多く残されています。

一方、近世の弘前藩における拠点港となった鰺ヶ沢では、上方から伝わったとされる祭礼文化が地域に根づき、今に受けつがれています。津軽の京祭りと言われる白（しら）八幡宮大祭です。

白八幡宮大祭の概要

鰺ヶ沢町で4年に一度行われる白八幡宮大祭は、延宝5年（1677）に始まり、元は弘前八幡宮祭礼と交互で行われていたとされます。神輿渡御に用いられる神輿は、貞享2年（1685）に上方で製作されたもので、白八幡宮には、そのことを物語る寄進札も現存します。また、近年の調査では、神輿の台座の金具裏に「大さか金田町　かざり屋五左衛門」の墨書があり、大阪府吹田市の江坂神社の社名額の細工人と同一人物であることが確認されています。

古式ゆかしい神輿渡御行列の付祭として運行される山車（やま）は、天保年間（1830～44）頃は5町が飾り山にしていました。当時は、京都祇園祭の山車用に製作された人形を購入することもあったそうです。山車はその後、曳き山車が主流となり、現在は10町が保有しています。

大祭に付随する主な芸能としては、各町で山車の行きの囃子で踊られるチャンチャレンコと、戻りの囃子で踊られる夜神楽があります。この他、町内に塩釜神社を祀る新町では、子供たちによる「カシ禰宜（ねぎ）」があり、安永9年（1780）、仙台の塩竈神社から伝わったものとされています。

青森県の山車祭りと白八幡宮大祭

青森県の祭りと言えば「ねぶた」「ねぷた」が全国的に有名ですが、下北半島の港町や南部地方では、近世に広まった神輿渡御に山車・芸能が伴う山車祭りが今も盛んに行われています。津軽地方においても、かつては弘前城下の弘前八幡宮祭礼をはじめ、弘前藩の支藩である黒石、青森・今別などの港町で山車祭りが行われていました。しかし現在はいずれも廃絶し、白八幡宮大祭だけが唯一存続している祭りとなっています。本州最北の日本海側に存在する白八幡宮大祭の分布上の特色は、北前船による海運がもたらした東北・北海道への祭礼文化の伝播経路を考えるうえで重要な位置を占めていると言って良いでしょう。

今年、令和3年8月に予定されていた白八幡宮大祭は、この度の新型コロナウイルスの影響により、大正時代以来約100年ぶりとなる1年延期が決定されました。災害や時代の変化など、さまざまなハードルを乗り越えながらも、先人たちが思いをつなぎ、340年以上にわたり今日まで大切に受けつがれてきた祭りです。また1年後、鰺ヶ沢の夏が白八幡宮大祭の華やかさに満たされ、人と人とが直接触れあうお祭りの醍醐味を味わえる日が来ることを、楽しみに待ちたいと思います。

白八幡宮大祭（次回は令和4年8月開催予定）